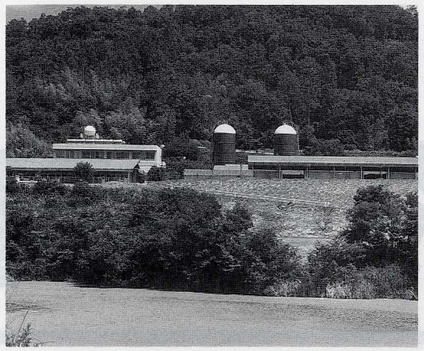
大地と家畜からのめぐみ
―農場体験実習―

この春から、体験することを基本にすえた表題の授業が、総合科目として生物生産学部附属農場でスタートしました。当初は、全学生向けの実習科目として準備したのですが、教養的教育検討委員の根平教授のアドバイスで、総合科目の一つとして開講が認められたものです。

生物生産学部の附属農場は、面積の上では新キャンパスのかなりの部分を占めていますが、鏡山などによって隔てられていて、日常気づかれないだけでなく、おいしいミルクと牛肉を生産しているにもかかわらず、残念ながら全学的に親しまれる場となっていません。



大きな教育研究機能を備えた素晴らしい農場を、まずは全学の学生諸君に知ってもらうことが大切だと考え、この体験実習を企画しました。もちろん教育の目標には、農業体験のできない学生にその一端に触れてもらい、若者が避けて通れない今日の環境、食料、人口問題などの課題を考えるときに必要なしっかりとした基盤を感知してもらうこと、あるいは、これからの生き方に何らかの影響を及ぼすような体験をしてもらうことを願って定められています。

幸い、農場関係の教官と全技官それに生物生産学部の多くの教官の協力を得て、しかも受け入れ人数を二十名に制限し、理想的な教育条件での授業が実現しました。今回の応募者は、八学部から四十四名（〇五生―四名、〇六生―十二名、〇七生―二十八名）で、二十四名もの方々に諦めてもらいました。

すでに十二回の講義を終え、以下に取りまとめた感想や印象にあるように、目標に向かって歩み出したという実感を得ています。今後も内容の改善に努めながら、この体験実習を、農場を教育の場とした全学向けの教育科目として定着させたいと思っています。

受講生の感想

○予想以上に充実した体験ができた。食べ物を作るという、人が知っていて当たり前のことを学ぶことができたような気がする。参加して本当によかった。

○家畜と触れあう機会は貴重なものだった。牛の腸に手を突っ込んだこと、羊の体重を測ったこと、牛の乳を搾ったことなど、どれも新鮮な体験でした。多くを得たこのすばらしい授業を続け、より多くの学生が体験できるようにしてください。

○農家なので農業のことは多少わかっていましたが、この授業に参加して現代農業の抱える問題点に気づいていなかったことを実感しました。実習はもちろん講義からも多くを学びました。

（以上〇七生）

○農業や畜産についてなんとなくわかっていましたが、実習でその一部に触れ、畜産業や食品加工業が以前より身近に感じられるようになりました。

牛や羊や豚を目の前にしてとても感激しました。かわいらしい子豚を抱いて生命の不思議さを感じましたが、それらの生命をいただいて生きているヒトをどう考えたらよいのか、戸惑ってしまいました。

一番印象に残っている体験は、搾乳と牛の直腸検査です。いろいろ考えるきっかけをもつことができた貴重な体験でした。実習も残り少なくなり、充実した時間を過ごせるように頑張ります。

○受講した理由は、ただなんとなくおもしろそうだということだけだった。実際に授業を受けて、自分がいかに食生活を安直に考えていたかに気づいた。スーパーで目にする食材としての肉を、その少し前まで生きていたということを何も考えずに買っていた。当然といえば当然のことかもしれないが、私はこの授業を受けて、今までそう考えていた自分に反省した。

普段触れあう機会のない家畜に触れられとても楽しく、さまざまなことを感じることができた。一回の授業がもっと長ければと感じたこともあった。

○この授業には講義だけでなく実習もあり、楽しく受講できました。牛や羊の行動を観察したり、実際に触れたり、ヨーグルトを作ったりといった普段できないことが経験できてよかったと思います。

羊の解剖は、図や説明ではなく実物を見ることでよく理解できたと思います。最近、理科の授業では解剖をしませんが、単なる知識として教えこむだけでなく、実際に経験することが重要だと思います。

講義も実習もあるのに、授業時間が九十分しかなく、時間が足りないことがあったのが残念です。

（以上〇六生）

○今までにできなかったことをいろいろと体験できた。印象深かったことは羊の解剖でした。冷凍保存されたものではなく、この観察のために殺されたものでショックでした。人類が学んだり発見するためには、生体実験は必要不可欠であることはわかっているつもりですが、羊の体の観察では考えさせられました。

牛のお尻から手を入れ、人工授精を体験しましたが、子供たちにも体験させれば、酪農に興味をもったり食物に感謝する気持ちが育ちやすいのではと思った。

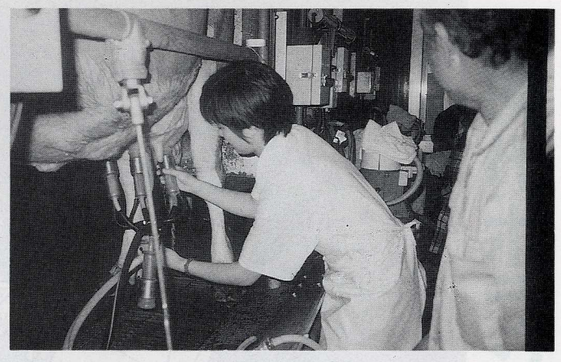
○同じ農場の運営を考えている先生にも違う考えがあったり、農業にはいろいろな考えが成り立つものだと思った。

私が家畜を飼うなら、できるだけ家畜の生活を尊重する立場から農業をやっていきたい。解剖や食品加工、搾乳など本当にいろいろ素晴らしい体験ができて幸せでした。

○今回の農場での体験は、どれも日常経験したことのないことばかりで、新鮮でそして驚きと戸惑いを感じずにはいられませんでした。

多くの人々が、このような家畜と触れあうことなく、肉や牛乳を何気なく食べ過ごしていると思うと、この実習の大切さを改めて感じます。

羊の解剖のとき、朝まで生きていた羊が置物のように横たわって死んでいるのを見て、自分の中から人間



としての理性が逃げていくようで怖かったです。それは、死んだ羊を平然と見ている自分が、自分を否定しようとする心の衝動を覆ってしまいそうだからです。

教師を目指している自分にとって、このような体験をこれからも求めていこうと思います。

（以上〇五生）

将来への展望

附属農場では、本来の教育研究に係わる機能に加え、今回の受講生からも指摘されているように、近隣の幼稚園や小中学校の先生方に焦点を合わせた公開講座を企画し、農場が持つ潜在的な教育機能を生かした子供の教育の場としても活用される道を考えています。今回の体験実習の経験が大きく生かされると思います。

また幸いにも、一昨年前、卒業生が農場を桜の名所にしたいと願いを込め、大小五十本もの桜を寄贈してくれました。親しまれる農場は、さわやかで美しくなければならないと考え、日常の片付けや清掃に加え、花を植える努力も払われています。

農場としての夢は、全学に支持者を得て、生産物が学内で消費される道を開くことです。安定した食料の生産には、健全な消費者からの支えが必要です。学内での生産―消費モデルの構築であり、実証しがいのある課題です。

多くの皆さんに農場を散策の場としていただき、四季の移り変わりなどを感じ取っていただきたいと願っています。現在、ミルクの販売は八時半から九時半までに限られていますが、一度新鮮な牛乳（滅菌する必要あり）を飲んでいただけることを期待しています。

生物生産学部附属農場長
山本禎紀（やまもと・さだき）